

## 地域学研究会 第4回大会 報告

1. 開会挨拶・大会の趣旨
2. 基調講演要旨
3. 分科会の概要
4. 総括討論要旨・閉会挨拶
5. 資料

## 開会挨拶

安藤由和（地域学研究会会長・地域学部学部長）

ご来場の皆様、本日はお忙しい中にも関わらず、本大会にご参加ありがとうございます。また、基調講演の講師を快くお引き受けいただいた藻谷様には感謝の念に耐えません。

この大会の主催であります、鳥取大学地域学部は地域再生のキーパーソン育成をめざして学部改組し、早いものでもう10年の年月が経ちました。この節目にあたって、今年、文部科学省特別経費事業経費が認められ「地域再生プロジェクト」を新たに推進して行く事となりました。嬉しい事では有りますが、より、地域学部としての真価が問われる事になります。



今回のこの大会を通じて、藻谷様初め、ご来場の皆様から、ご提言や、ご意見、ご批判をたまわり、今後の地域学部や地域学研究会のあり方を示唆していただければ幸いです。

本日、夕刻までの7時間足らずであります、ご来場の皆様がたの活発なご議論をお願いして、第4回地域学研究大会開催のご挨拶といたします。本日はどうぞよろしく願いたします。

## 第4回地域学研究会大会の趣旨

藤井 正（地域学研究会副会長・地域学部副学部長）

地域学部は地域の公共的課題解決にむけた教育研究の展開を目的としています。その地域の課題には、自然環境・経済・社会など多様な要因が関係し、専門分化した個別学問分野だけで解決にむけた研究展開を図ることには困難が伴うものです。そこで学際的な視野が求められ、地域学という視点が生まれてきたわけです。また、地域課題には、様々な主体（住民、行政、企業、大学・・・）が取り組み、主体ごとに、地域課題に取り組むアプローチの仕方も異なります。それぞれに強みもあれば、また、それぞ



れの視野から漏れ落ちることもあり、これらの主体の協働による取組が求められます。

また鳥取大学は今年度から文部科学省特別経費事業により、地域学部を中心に「地域再生を担う実践力のある人材の育成および地域再生活動の推進」をテーマとするプロジェクトを3カ年にわたって実施します。

そこで今年の地域学研究会第4回大会では、「地域課題と知のクロス～地域再生のための教育・研究の拠点形成～」と題し、地域課題の解決を担う人材育成のあり方や地域再生に向けた大学の役割について、講演会や分科会を通じ、多くの市民のみならずとともに議論を深めたいと考えます。

まず第1部基調講演として、全国の地域の状況を現地で把握され、最近にはNHKの特集の取材もとに『里山資本主義』をともにまとめられた、藻谷浩介氏<(株)日本総合研究所調査部主席研究員>に、「地域課題解決のために大学が果たすべき役割 ―地域で求められる人材育成―」についてご講演を頂き、現代の日本における地域課題やこれからの基本的なビジョンを理解し共有したいと考えます。

つづいて午後の第2部では下記のような3つの分科会とポスター報告を行います。分科会では地域学部の教員や地域連携研究員が行っている研究事例や社会実践について各3報告を行い、そこで培われた「知と実践のクロス」に対して自治体や地域の方からのコメントも頂きます。

・第1分科会「コミュニティの再生と社会的包摂」

都市では住民の孤立化が進み、農村では過疎化や限界集落が問題となるなか、安心・安全で持続可能なコミュニティづくりが共通の重要課題になっています。一方、障がい者や定住外国人など少数派の人々の排除も依然として深刻です。第1分科会ではこのような視点から、高齢者やマイノリティの社会的包摂に向けた取り組みなど多様な側面からコミュニティ再生のあり方について議論します。

・第2分科会「環境の活用と再生」

地域の貴重な資源としての自然環境や歴史環境は、地球環境の保全としての意味やそれら環境の持続可能性だけでなく、その地域で暮らす人々の生活の持続可能性からも考え、活用と地域再生を位置づけていくことが求められています。第2分科会では、このような視点から、自然・歴史環境と地域の人々の生活、地域再生をつなぐという課題について議論します。

・第3分科会「文化の再生」

地域づくりは、住民が主体となって地域固有の価値を活かしながら取り組むことが重要です。最近、文化に焦点を当て住民間のコミュニケーションの再生をはかる取り組みが増えています。途絶えていた地域の祭りの復活やアーティストを招き滞在し活動をしてもらうアーティスト・イン・レジデンスなどです。第3分科会ではこのような視点から、伝統文化やアートのもつ意義と活用の可能性について議論します。

なお、地域連携研究員とは平成24年に地域学部でスタートした新しい制度です。地域(学外)の方で、地域学の教育研究の充実・発展および本学部と地域の連携活動の推進し、地域の人材育成や課題解決をすすめるため、本学部が行う地域の研究や地域づくり、地域連携活動等を協力して進める自治体や企業又はNPOの職員等の方をお願いするものです。

分科会では、それぞれの学問分野の分析枠組みをつうじて、地域課題を、どのように探求し定式化するか、また学外との協働のもと、どのように実践を進めているのかを提示します。そして、それに対し行政など地域の視点からはどのように考えているのか、アプローチしているか、その違いから/その共通性から、地域課題のどのような性格が浮き彫りにされていくかコメントータからの

意見も頂きます。現在の地域課題が複雑で複合的であり、また、社会条件や時間の推移に応じて、その課題性を変化させるようなものであるだけに、多様な主体による、多様なアプローチを通じて、そのような地域課題の複雑性／複合性をまず浮き彫りにしていくことがまず重要です。そのことによって、従来の手法でうまく定式化／見える化できなかったことがらに対する手がかりを得られる可能性があるのではないのでしょうか。

地域学部においては、学部を構成する諸学問間を横断するかたちでこのようなプラットフォームづくりを「地域学」の創生として、まだまだ十分とはいえないまでも取り組んできました。これをふまえながら今回の地域再生プロジェクトでは、さらにもう一步踏み込んで、地域との協働を進め、それぞれのアプローチの特徴あるいは経験を交叉することから、共通のプラットフォームづくりを目指します。

この地域学研究会大会では、地域課題にアプローチする上で、様々なアプローチが、基礎的なところで依拠する「土台」とでもいえるものを求めるとしたら、それはどのようなものか、それをつくる際に大学の果たすべき役割、地域再生のための教育・研究の拠点としての大学の可能性について、地域学研究大会の基調講演、各報告そしてディスカッションを通じて探りたいと考えています。

※鳥取大学地域再生プロジェクトの詳細については、地域学 HP や Facebook（鳥取大学地域再生プロジェクトで検索）をご覧ください。



## <基調講演要旨>

### 【第1部】基調講演

## 「地域課題解決のために大学が果たすべき役割 —地域で求められる人材育成—

藻谷 浩介（日本総合研究所 主席研究員）

地域に根差す大学の役割とは何でしょうか。まず人材育成では、どういう人材育成か。都会の大企業に従順でよく働く純朴な田舎育ちの若者を供給する。それは違いますよね、もう1個あります。地元エリート官僚ですね、地元では偉い、東京へ行くとへこへこの卵を供給する。これも違いますね。現場で考え、仲間と実践する習慣を持つ若者を育てる、これに尽きるのではないのでしょうか。実は今、国際的大企業で一番必要とされているのもこういう人材です。これが世界に通じる日本人なのです。逆に、東京の大企業で言われたとおりに働いている人とか、地元でエリートの卵をやっている人は全然世界に通用しないです、その狭い世界でしか通用しない人です。

次に、地域に根差している教授の皆さんは、鳥取大学の皆さん方も同じだと思いますが、ネットワークでやっているんですね。地元の人たち、そして世界の人たち、あるいはいろんな人たちの関係者をつなぐ人の交流のハブとなると。あの人に相談

するといろんな人が紹介してもらえるし、この人は地域のいろんな人間が本当は何を考えているか知っている。

大学教授は専門知識とは別に課題を発見し克服するというやり方の定式を持っています。汎用的行動様式や汎用的思考力。コンサルティングというも専門知識を生かす場ではなくて、汎用的な思考力を生かす場です。コンサルティングは専門知識でやるものではありません。課題を発見して、どうやって克服するかという過程をともに歩むのです。だめなのは、研究だけして、ネットワークもしない、コンサルティングもしない、人材育成もしない教授。でもそれは、しょせんタコつぼにしかありません。誰も読まない論文を書いて、何も残らない。一方、地域でやれば人材も残るし地域も残ります。必要なのは専門知識ではなく、事実を把握し行動するという汎用性ある行動





様式です。

日本文化的な思考様式というのがあって、それと大学と対峙して考えたほうがいいですね。日本文化的な思考様式とは何か。二分法です。何でも二分法。単純化させる。地域という総合的なものに向き合ったら、何学とか言っている場合ではない。それはつまり、自分か他人かという二分法を脱出するということですね。

そしてその脱する先は4つあるのです。まず一次元思考です。一次元思考というのはグラデーションつきの把握でして、右か左かではなくて半分右とか、灰色がいっぱいあるのですね。灰色がいっぱいある、せめてこの思考法が必要なのです。『里山資本主義』の批判で、マネー資本主義を否定し、みんなで里山に回帰すべきだと言っているが、しかし、それは不可能であるというものがあります。でも私たちは、サブシステムとして里山資本主義もあったほうがいい、保険としてマネー資本主義の横に置いておいたほうがいいですよと前書きからちゃんと書いているのです。その人は、いきなりゼロか1かなのですね。つまり、「里山資本主義」という本を出したらマネー資本主義を否定したと。本ではグラデーションつければいいのですよという一次元思考的な紹介をしていたのですが。

せめて二次元ぐらいまではなあってほしいですね。十字形にしてやるという思考法ですね。さらに三次元思考。立体的俯瞰。これはなかなかできないのですが、やらなきゃいけない。でも、一番大事なのは四次元思考です。過去と未来も俯瞰するという見方。要するに時間軸も入れるということですね。こういう文脈の中でこうなってきた結果、こうではないか、だからこうだろう、この俯瞰という言葉が、これがとても大事です。大学は俯瞰する能力を身につけるところではないでしょうか。大学教授は俯瞰能力を常に修行している人間のことでないのでしょうか。

関連して手段が目的化されていることがよくあります。たとえば受験という手段に狂奔するけれども、その先に何を目標しているのかわからない。いい大学に行って、その後、何を目標するのか。同じように明確化された役割を振られる、例えば、国際人になれ、大学に合格しろ、いい会社入ってこい。明確化された役割を振られると、目的はよくわからないけれども遂行に邁進する。でも本当は、何のためなのか、何のためにやって、何が本質なのか。自分で考えて動く態度が必要なのです。

このような考え方からすると、例えば、何のために経済成長するのが問題になる。経済成長はいけれども、何のためにするの。でもそう言うと、藻谷は経済成長を否定しているとかいうような、ゼロ・イチに戻るわけです。

後半に移ります。ここからは、私が日ごろ地域ではこういうのが課題なのですよという話、根幹的に重要な人口の話をしませう。

鳥取県は人口が残念ながら減っている県です、一番小さいのに。10年間で4万4,000人減るだろうというのが社会保障・人口問題研究所予測です。減少率の予測には詳細な議論が可能ですが、減ことは減るのです。コンサルティングの世界で問うのはそういう議論ではなくて、皆さん、これはどういうことか考えたことがありますかということです。このペースで人口が減ると130年で県民がいなくなる。

年齢別に考えます。まず鳥取県の0～14歳の子供はどうなるのか。65年ぐらいで子供がいなくなるのです、このペースでいくと。また、15～65歳の現役世代は、60年少々でいなくなってしまうのです。ふえている人がいます。65歳以上の人が10年間にちゃんと1.3万人ふえるのですよ。少子

高齢化を指摘することの一番いけないところは、現役が減っているという問題に目をつぶっちゃうということです。問題は子供の問題であり、年寄りの問題であるというふうに話をすりかえるために、少子高齢化が使われています。また、関西と鳥取と子供の減少は変わりません、なぜか。鳥取は出産適齢期の女性の数は少ないのですが、出生率がすごく高いのです。関西は若い女性は多いけれども出生率が低い。それから関西でも、98年で現役がいなくなるのです。

こう考えるとその結果、否定されるのは、都会と田舎が区別されていることが否定される。田舎は高齢化しているといわれるが、都会も高齢化している。75歳以上はどうなっていると思いますか。鳥取はプラス9%、余り増えていないのですね。では、関西は10年間でプラス43%です。都会のほうが年寄りの増え方が急速なのです。さらに東京は若い女性がすごく多いのですが、ただ出生率が大変低いので、非常によくない。というか、子育てできないのですね。

頭の中における都会対地方という枠組みを壊してください。現役世代がいなくなるのは、鳥取が65年、関西が100年、首都圏が150年、大した違いはないのです。でも全ての原因は経済だということに



して、全て景気が悪いとか、地域間格差だとか言い出して、物事の本質に向き合おうとしない。現実には、こういう人口減少が日本中で起きている。

一方で学生諸君、君らがまだ現役で働いているうちに、当たり前ですが、上の世代は次第になくなるわけです。福祉負担は軽くなるわ、病院は余るわ。わかりますか。したがって、君たちが本当にやらなければいけないことは、君たちの下の世代の子供たちが、こんなに減らないようにすることなのです。これがこの予測のとおり減っていけば、君たちを後から面倒見てくれる人はいない。国際競争、もうけの配当、経済成長とかはどうでもいい。人が普通に暮らして、自然といつの間にか平均2人ぐらい子供がいますという状況をつくり出すことができれば、こんなに減らないのです。そうすると、君たちが年をとっても、年金は十分もらえるし、困らないのです。

一番いけないのは、子供が下手すると3分の1以下になることですね。これは何とかならないのか、もちろんいろんな理由があるわけですが、ただ、経済的理由だけで仕方なく子供を産まないというのは、いかがなものですか。そのような世の中はいかがなものかと、産んだ人が苦勞する世の中というのはおかしいのではないかと。子供は社会全体の宝です。

地域ごとに大きな違いがあります。例えば東京では、要するに年寄りが大爆発増。現役は余り減らないといっても減る。一方、鳥取県はこれから先、年寄りももう増えなくなります。あとは子供がさらに減るのを防いでこう持ってこられれば、現役も減り止まっていくのです。なお、鳥取では85歳以上だけは、今から30年でやっぱり2倍近くにふえるのですね。このことをきちんと認識しなければいけないのです。鳥取県が96%増で、日本全体は171%増なのです。首都圏に至っては、240%増、3.4倍です。これはちゃんとどうするのか、2つのディメンションから考えなければいけない、

どう支援するのかということと、本人自身がどういう老後を送るのかというビジョンをちゃんと持って備えておかないといけない。自助と共助と公助を全部投入しないと支えられません。これはちゃんと考えなければいけないし、対策を打っておかなければいけないのです。こうしたどんどん現役が減り年寄りがふえるという、非常に不安定な状態にけりをつけることに成功しているのが、例えば、長野県下條村です。もう十数年前から現役が減っていないし、今後も減らないでしょう。十数年前から年寄りが増え止まった。今後も減らないけれども増えません。子供はちょっと減ったのですが、これからはむしろ減り止まります。その結果として、高齢化率が横ばいになり安定するのです。

こういうところもあるのです。そういうことが理念上は可能だということです。ここの村は何の特徴もないのですが、子育て支援を日本で一番熱心にやっている村です。近くに飯田市という小さい町がありまして、そこに40分ぐらいかけて通勤する人がいるのですが、その人たちの中で、特に子育てをしたい人を優先的にどんどん空き家に入れていくわけですね。子育てしたい人は来てほしいというふうにナンバーワンプライオリティーを置いている。ちなみにみんな共働きです。だから、どんどん預けて働きに行ってくださいと。

またこの下條村では、85歳以上も1.5倍増弱ぐらいで済むのです。絶対数でいうと120人ばかりふえる。120人なら何とかしようという勇気が湧いてくるのですね。大き過ぎる問題は細分化して個別に対応することで解決するのです。話が大き過ぎるときは小さく分けて、それぞれに対処する。まさにこういうコミュニティを一個一個ふやすことができれば、全体としての問題は解決していく。

世界的に考えると、30年前の日本が今のタイと同じところにいました。25年前、日本は今の中国にすごく近いところにいました。でも今の日本では、もうこれから全体として65歳以上は1.3倍にしかならない。世界全体から見たら他のほとんどの国に比べて、年寄りが一番ふえないのです。

さて、このように鳥取県は、これから年寄りはあまり増えなくなります。女性は少ないけれども子供は生まれているし、社会活動も多いところです。実際問題として、健康で文化的で飯がうまくて、すぐ都会に遊びに行けて、すばらしいところです。空気もきれいだし。ただちょっと天気が悪いですが、大阪に比べて、夏などは全然過ごしやすいですよ。

皆さん、この鳥取の地域のよさを、世界的な位置づけから考えると、皆さんの課題は明らかでしょう。つまり皆さんは、とめられることをとめましょう。出生率がこれ以上下がるのをとめて、子供を増やしましょう。そして、当地で勉強した人や暮らした人が戻ってこられるようにしましょう。前向きにできることとして、むしろ都会育ちの人で、まともな人間らしい暮らしがしたい人をもっと呼び込めるでしょう。

社会では役に立つのは、人と一緒に走りながら、みんなを高めていける、目配りできる力です。鳥取大学というのは、そういう力を持つ人をつくっている大学なのではないか、つくっていただきたいと思います。

(要約：地域学部 藤井 正)



## 【第2部 分科会報告】

### 第1分科会「コミュニティの再生と社会的包摂」

[座長・副座長] 柳原 邦光（地域文化学科）・竹川 俊夫（地域政策学科）

[コメンテーター] 尾崎 史明（鳥取県地域振興部とっとり暮らし支援課長）

川本 晴彦（鳥取県総務部人権局人権・同和対策課長）

都市では住民の孤立化が進み、農村では過疎化や限界集落が問題となるなか、安心・安全で持続可能なコミュニティづくりが共通の重要課題になっています。一方、障がい者や定住外国人など少数派の人々の排除も依然として深刻です。第1分科会ではこのような視点から、高齢者やマイノリティの社会的包摂に向けた取り組みなど多様な側面からコミュニティ再生のあり方について議論します。

#### 【第1報告】発表要旨

##### 「山里の聞き書き」という手法 —鳥取県智頭町山郷地区の「聞き書き」から—

清藤奈津子（鳥取大学地域学部地域連携研究員／NPO 法人山里文化研究所理事長）  
家中 茂（鳥取大学地域学部地域文化学科）

#### 1) 本報告の背景

本報告は、2013年度から開始された「鳥取大学地域再生プロジェクト（「地域再生を担う実践力ある人材の育成及び地域再生活動の推進」）の一環である「地域再生フィールドワーク／山里の聞き書き」についての紹介を中心とする。なお、「地域再生プロジェクト」は、その実施において地域と大学の「協働のプラットフォーム」をつくりあげるという点に眼目がある。今回の聞き書きも、山郷地区振興協議会（総務省「過疎地域等自立再生緊急対策事業」2013年度）との協働事業として実施した。現在、山郷地区では、2011年度末の小学校統廃合をうけて、空き校舎活用策として農村レストランを構想している。今回の「聞き書き」の取り組みも、山郷地区の過去と未来を結び、世代を結び、来訪者と地区住民を結ぶ役割が期待されている。

#### 2) 聞き書きとは

「聞き書き」は、地域の「生きられた」歴史の記録である。それと同時に重要なことは、それ自体が、語り手と聞き手が対面し互いの個性に出会うことでうみだされる歴史的出来事といえることである。たとえば、今回、お話を聞かせてくださった山郷地区のお年寄りと鳥取大学地域学部の学生とのあいだは、およそ60才の年齢差があり、生まれ育った環境や経験した社会条件も大きく隔た

っている。そうでありながら、学生たちは、お年寄りから昔の暮らしぶりを教えていただきながら、これからの時代を生きるうえでの大切な「気づき」を受け取っている。一方、お年寄りも、学生という聞き手の登場があつてはじめて、人生を振り返り、自らの言葉で語る機会を得ることができたといえる。このように、世代や社会環境の隔たりを超えて、相互の人生に対する深い理解と畏敬をうみだすことができるのが、「聞き書き」という手法である。

### 3) 「山里の聞き書き」から

地域学研究会当日の報告では、清藤奈津子氏に、これまでご自身が「聞き書き」をつうじて得た体験や、「聞き書き」の指導をつうじて話し手と聞き手の双方に生じた相互理解や相互変容のようすについてご報告いただく。そのことから、「聞き書き」という手法のもつ可能性について考察するとともに、本テーマセッションに設定されている「コミュニティの再生と社会的包摂」という大変大きい課題についてアプローチする手がかりを得たいと思う。



なお、大会当日は、今回の聞き書き作品である『つながる、つなげる—山郷からの贈り物／鳥取県智頭町山郷の聞き書き』(11月30日発刊)を学生がロビーにて紹介し、ポスターセッションにおいても発表する。実際の作品を手にとっていただいたり、学生たちからも感想を聞いていただきたいと思う。また、参考として、聞き書き集の表紙、目次、あとがき、事業実施経過などを載せたA4版の資料も、第1分科会会場にて報告時の資料として配布する予定である。

## 〔第2報告〕発表要旨

### 在住外国人の社会的包摂 —鳥取県中部地域の「Tori フレンド network」を事例に—

三谷 昇 (湯梨浜町立羽合小学校)  
仲野 誠 (鳥取大学地域学部地域政策学科)

## 本報告の背景

本報告では「鳥取大学地域再生プロジェクト」(「地域再生のための調査・研究・実証実験等の実施」)のひとつである「包摂型コミュニティ形成プロジェクト」を紹介する。その事例として倉吉市を中心に鳥取県中部地域で活動し始めた「Tori フレンド network」(以下「ネットワーク」)という外国にルーツをもつ住民たちとその仲間たちによる自助グループを取り上げる。

このグループができたきっかけは2009年度から3年間、本学と倉吉市人権政策課が倉吉市で実施した鳥取大学地域貢献支援事業である。2009年度は「わたしたちの隣人と出会いなおすために」、2010年度は「越境する女性たち—新しい土地に根を張るといふ経験」、そして2011年度は「“外国にルーツをもつ人”と“日本人”が住民として出会うということ」という3回のフォーラムを開催した。これらのフォーラムで外国にルーツをもつ当事者住民の声を蓄積していったことが、この自助グループが立ち上がるきっかけになった。

誰の声を聞いているのか

この「ネットワーク」が重視していることは「当事者の声を聴く」行為から出発することである。それは外国人住民をめぐる課題を仲間とともに手探りで提示し、みんなで一緒に考えるという協働の一連の行為である（図1）。

そこにみられるのは「専門家」の声に「素人」が従うというモデルではない。「支援者」たちも当事者に教えられ、地域課題を住民同士でともに考えるきっかけが生まれる。誰が誰を「包摂」あるいは「支援」するのか

一般的に「社会的包摂」という言葉からイメージされるのは、「強い者」が「弱い者」を包摂するというモデルだろう。ところが本事例が提示しているのは、当事者の声を聴くことによって「支援者」や「専門家」たちが地域の再生に関する大切な気づきを得ていくことである。それによって地域における多様な住民同士の関係性が回復し、それぞれが「地域の当事者」として外国人住民とともに包摂される地域を再生するきっかけになるのではないだろうか。

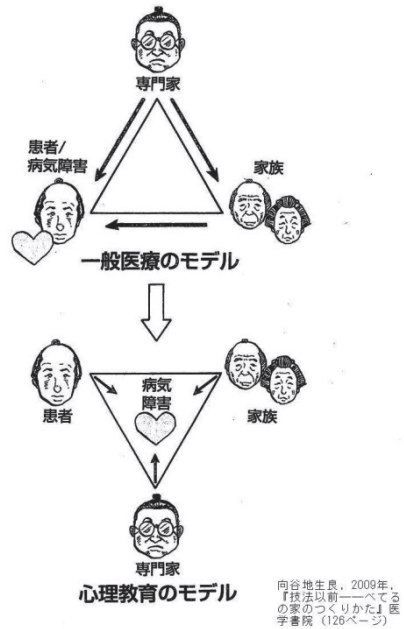


図1 ふたつの関係性のモデル

### 参考文献

浦河べてるの家, 2002年, 『べてるの家の「非」援助論』医学書院

向谷地生良, 2009年, 『技法以前—べてるの家のつくりかた』医学書院

### [第3報告] 発表要旨

#### 刑務所を出所した障がいのある人の支援

小林勝年（鳥取大学地域学部地域教育学科）

中川康恵（特定非営利活動法人ひつじの会理事）

### 地域定着支援センター開所に向けた取り組み

2010年7月刑務所を出ても行き場がなく犯罪を繰り返す障がいのある人の支援施設として全国で25番目に「鳥取県地域定着支援センター」が開設された。2009年1月に南高愛隣会が全国初のセン

ターを開所してから遅れること1年半。実は本県では一人の相談員の呼びかけによってセンター開設に向けいち早くネットワークが構築され2009年3月には県知事に対して設立要望書が提出されるなど全国に類を見ない形でその下地が整えられ熱心な取り組みがなされてきた。

#### 福祉の支援が必要な刑務所出所者の実態

概ね65歳以上の高齢者または身体障がい、知的障がい若しくは精神障がいを有する矯正施設入所者で、住居や家族等の受入先がなく、保護観察所から特別調整協力等の依頼のあった福祉的な支援が必要な出所予定者を「特別調整対象者」と呼ぶが、鳥取刑務所においては昨年24名を数えた。



彼らの平均年齢は47歳で60歳代10名、70歳代9名と65歳以上が約8割を占める。直近の罪名は窃盗・詐欺・住居侵入罪などで受刑期間は平均で約3年5ヶ月間、累犯回数は平均4.5回であった。出所しても「受け入れ先なし」と回答した者の再犯回数は平均7であったのに対して「受け入れ先あり」と回答した者の再犯回数は平均2.4となり、受け入れ先の無い者ほど犯罪を繰り返す傾向にあった。また、受刑者全体の25.0%に知的障がいがあることが認められたがそのうち療育手帳保持者は8.2%とすぐに福祉の支援が受けられない者がほとんどであった。

#### 負の連鎖は止まらない

彼らの人生を辿ると、障がいがあるために進学できない、低学歴や障がいを理由に就労できない、あるいはできてもすぐに解雇される。そして、やがては「孤独」となり生活苦から罪を犯してしまう。障がいに加えて犯罪者としての烙印が押され、ここに及んで家族にも見放されてしまい、仕事・お金・信用・住居などを次々と失い「負の連鎖」が加速化する。そして、地域社会から隔離された塙の中にこそ居場所を求める『累犯障がい者』となってしまっていた。(障がい+受刑者+累犯者という三重苦を強いられている人は受刑者全体の約3割にも上る。)

#### 社会的包摂課題の提示～障がい発生の社会モデルの視点より

そうした中、刑務所社会福祉士や保護監督所保護観察官、地域定着支援センター相談員などによって福祉の支援が行き届かない課題について整理されてきた。先ず一つは①住民票がない ②身元を保証してくれる人がいない ③社会保障の受給資格がない などの生活環境上の問題である。次に、①社会生活を営む能力が不足している ②健全な社会参加の経験が乏しい ③人に頼ることを嫌う ④場当たりの行動に向かう傾向が強い などの本人が抱える問題である。しかしながら、障害のある人が罪を償って出所しその後地域生活を維持していくためには犯罪発生時からのきめ細やかな支援が必要であり、「市民→容疑者→逮捕者→被告人→犯罪者→受刑者→出所者→市民」という各段階に応じた福祉サービスの提供とこうした人を包摂していく地域住民の意識こそ重要な課題であることが再認識されるようになってきた。

## 第2分科会「環境の活用と再生」

[座長・副座長] 光多 長温 (特任教授)・藤井 正 (地域政策学科)

[コメンテーター] 佐々木 孝文 (鳥取市教育委員会文化財課課長補佐兼文化財専門員)

堀田 利明 (鳥取県生活環境部砂丘事務所長)

地域の貴重な資源としての自然環境や歴史環境は、地球環境の保全としての意味やそれら環境の持続可能性だけでなく、その地域で暮らす人々の生活の持続可能性からも考え、活用と地域再生を位置づけていくことが求められています。第2分科会では、このような視点から、自然・歴史環境と地域の人々の生活、地域再生をつなぐという課題について議論します。

### [第1報告] 発表要旨

#### 歴史的環境を活用する視点

高田健一 (鳥取大学 地域学部 地域環境学科)

歴史的環境 (Historic environment) とは、「時の流れの中で積み重ねられ、人と場の相互作用の結果できた環境のあらゆる側面 (All aspects of the environment resulting from the interaction between people and places through time)」を指す (English Heritage 2006)。これは、単に文化財 (cultural properties) という概念では包括しきれない内容をもっている。地域で暮らす人びとの生活と密接に関わって形成され、固有の価値が込められた「場所性」をもつ点で、より普遍的かつ重要な概念と言えよう。(堀川 2000)。

ごく身近な事例として鳥取大学周辺をフィールドとするだけでも、現代の姿が長期にわたる人と場 (土地) の相互作用の結果であることが理解でき、私たち



を取り巻く世界をより深く知る重要な手がかりになるのである (高田編 2008)。少なくとも、私たちが文字通りよって立つ土地の成り立ちや履歴を知ることが、起こりうる災害を予期したり、適切な地域計画を立案するといったレベルでも重要な知見であろう。

ところが、このような歴史的環境を適切に評価し、保護し、活用する仕組みを私たちはまだ十分にもっていない。現行の文化財保護制度は、基本的には、精選された優品の保護に重点を置く指定



主義的な考え方に基づいたものであり、その価値基準が学術的に重要なものや国家的な視点に偏っている点が課題である。この制度では、私たちに「なじみ深い」という理由だけで親しんだり、大切に思ったりしている風景や町並み等の歴史的環境の多くを保護できない現実がある。文化財保護法の中にも、指定制度を補完する登録文化財制度が設けられてはいるが、同様な制度をもつヨーロッパに比べて十分な厚みをもっているとは言えない。

歴史的環境が適切に保護されるためには、それを保存したり、利活用したりすることが合理的かつ魅力的であるような仕組みが必要である。そのためには行財政制度の変革も必要になってくるが、新たな社会的価値の創出も有効であり、それが継続するような好循環を生み出すことが重要である。これには地域の大学が果たすべき役割が大きい。地域の歴史的環境を調査し、その意義や魅力を明らかにする。あるいは、その特性を活かした利活用の方法を提示する、といった活動は、その好循環を生み出す原動力になる。

## 参考文献

- 高田健一 2008 「歴史的環境としての遺跡」『ヒストリア』第211号、大阪歴史学会  
 高田健一（編）2008 『私たちを取り巻く歴史的環境-鳥取大学と鳥取県の合同シンポジウムの記録-』鳥取大学地域学部地域環境学科・鳥取県教育委員会事務局文化課  
 堀川三郎 2000 「運河保存と観光開発—小樽における都市の思想」『歴史的環境の社会学』シリーズ環境社会学3、新曜社  
 English Heritage, 2006. *Conservation Principles, For the sustainable management of the historic environment*

## 〔第2報告〕発表要旨

### 自然環境を活かした運動による地域活性化の検討

関 耕二（鳥取大学 地域学部 地域教育学科）

## はじめに

近年、ホノルルマラソンや東京マラソンに代表されるように、国内外でランニングイベントが多数開催されて多くの人々が参加している。このようなマラソン大会以外にも、これまでスポーツイベントで多くの人を集め地域の活性化が図られてきたが、スポーツイベントではイベント時の一過性の盛り上がりには留まることや、過疎地域においてはイベントの後継者不足が課題とされている。一方、旅行と健康増進を融合したヘルスツーリズムが地域活性化の方策として注目されてきている。ヘルスツーリズムとは、病気やけがの治療・療養のほか、美容・痩身、ストレス解消、体力増強など健康増進を目的とした旅行形態である。旅行という非日常的な「楽しみの要素」と健康を維持・回復・増進するための「医学的な要素」を掛け合わせた、新しい観光形態であり、医療に近いものからレジャーに近いものまで様々なものが含まれる。

このように、地域活性化の方策として「運動」「スポーツ」「健康」は益々、注目されているが、なかでも過疎の山村地域においては、その地域の「自然環境」の活用が積極的に行われている。例えば、ランニングイベントであれば、山間部や林道を走り抜けるトレイルマラソンの参加者が増加しており、中高年の登山者の増加の著しい。しかし、自然環境の保全や運動実践者の安全確保など課題も多い。また、ヘルスツーリズムであれば、その地域特有の森林や温泉を活用した森林浴や温泉療法、さらにはその地域特有の食材を用いた健康食品や料理の開発などが行われているが、科学的根拠の明示について課題が多い。

そこで、本プロジェクトでは、自然環境を活用した運動による地域活性化について、既存のスポーツイベントの検証とヘルスツーリズムでの活用を目指したウォーキングコースの開発を行うことを目的としている。

本発表では以下の3つの内容を中心に紹介する。

- 1 兵庫県北部の小代地域のランニングイベントについて  
(兵庫県立村岡高等学校地域創造類型の生徒と地域教育学科2年生の調査実習の成果)
- 2 鳥取砂丘におけるランニングトレーニングの効果について  
(当研究室のこれまでの研究成果の一部)
- 3 鳥取県日南町大宮地域におけるウォーキングコースについて  
(鳥取大学地域政策学科筒井研究室と地域教育学科福田研究室と共同研究の成果および鳥取大学医学部病態運動学講座の加藤敏明准教授との共同研究の成果の一部)

## 参考文献

1. 関耕二, 砂丘地域でのスポーツ活動. *体育の科学*, **63**, 298-303 (2013)
2. 籾木毅, トレイルランニングレースで地域活性化について. *ランニング学研究*, **21**, 41-45 (2009)

## 【第3報告】発表要旨

### 鳥取砂丘の個性発信に向けた「鳥取砂丘学」の構築

小玉芳敬 (鳥取大学地域学部地域環境学科)

## はじめに

「鳥取大学を卒業しました。」「砂丘はどうだね?」「エー……と、ダダ広い砂場ですね。」毎年1,300名ほどの学生が鳥取大学を巣立ち、全国各地で活躍する。彼らは鳥取PR大使のはずであるが、先の会話ではその役割をほとんど果たしていない。鳥取大学ではこれまで散発的に砂丘を扱った講義は行われてきたが、真正面に「鳥取砂丘学」を名乗った講義は開設されてこなかった。大学には砂丘に関連する膨大な学術的知見が蓄積されている。砂丘の成り立ち、砂丘に見られる地学現象、気象水文現象、砂丘に生きる動植物の生態、考古遺跡から復元する人々の暮らしや当時の環境、砂丘に関連した芸術作品など、実に多角的な知見である。これらは砂丘や鳥取の魅力を高める貴重な素材となる。そこで平成26年度より、全学共通科目で「鳥取砂丘学」を開設する。多層的な鳥取砂丘の魅力を語れるように一人でも多くの学生を育てていきたい。

### 自然の回復力を物語る1事例の紹介

本報告では鳥取砂丘に見られる2つの自然環境的課題、つまり「海岸侵食」と「砂丘の草原化」をとりあげ、その原因を探るために実施した「流域スケールの調査研究」を通して明らかになった「自然の回復力」に関して紹介する。自然に対する畏敬の念を感じていただければ幸いです。

最近40年間、千代川がどれほどの量の砂礫を運搬してきたのか？ このことは、鳥取県立博物館が5年おきに撮影してきた空中写真に、その証拠が記録さ



れている。砂丘海岸の浅海底には海岸線にほぼ並行する砂の高まりが2列存在する。これらは沿岸砂州と呼ばれる波の作用で形成された地形で、河川が運び出した砂礫によって構成される。沿岸砂州は頻繁にその形を変え、ビーチの堆積物にも強く影響する。空中写真から沿岸砂州の規模を調べた結果、1968年～1998年にかけては西から東へと沿岸砂州の規模縮小が進み、2003年～2008年には規模がいきなり拡大したことが判明した。前者は1950年代後半～1970年代にかけて日本中で実施された川砂利採取（コンクリート骨材として利用）の影響である。千代川においても同様である。1980年代から深刻化した海岸侵食は、沿岸砂州の規模縮小とともに川砂利採取の負の遺産といえる。いっぽう後者は、1998年と2004年に千代川で発生した大規模出水の反映である。これらの出水により、千代川の河原は砂であふれ、その後の中規模出水で砂が河口部まで運ばれた。そのため大規模出水に少し遅れて沿岸砂州の規模拡大が生じたのである。

ではビーチの砂は最近50年間どのように変化したか？海岸侵食の進行に伴い、粗い砂がビーチに残留した。1955年には0.5 mm以細であったものが、2004年～2009年には1.0 mmへと粗粒化していた。それが2011年以降、急激に細粒化し、0.5 mm以細へと戻りつつある。

以上のように、砂の量・質ともに鳥取砂丘海岸では自然状態が回復している様子がデータの裏付けを伴って明らかになりつつある。すると砂丘の自然環境も今後、自ずと復元してくると期待される。ビーチからの飛砂が砂丘内の飛砂を活発化させるからである。自然に安易に手を加えず、腰を据えて自然の振る舞いを記録する。このような自然との接し方が、今後ますます求められる。

## 第3分科会 「文化の再生」

〔座長・副座長〕 野田 邦弘（地域文化学科）・榎木 久薫（地域文化学科）

〔コメンテーター〕 加納 英雄（平田一式飾保存会技術部長）

白岡 彪（トトリプロダクツ協議会プロデューサー）

地域づくりは、住民が主体となって地域固有の価値を活かしながら取り組むことが重要です。最近、文化に焦点を当て住民間のコミュニケーションの再生をはかる取り組みが増えています。途絶えていた地域の祭りの復活やアーティストを招き滞在し活動してもらおうアーティスト・イン・レジデンスなどです。第3分科会ではこのような視点から、伝統文化やアートのもつ意義と活用の可能性について議論します。

### 〔第1報告〕 発表要旨

#### 山陰を中心とした「一式飾り」の文化的価値と継承の課題

高橋 健司（鳥取大学地域学部地域教育学科）

#### 1. はじめにー「一式飾り」とは何かー

「一式飾り」とは、鳥取県西部から島根県東部の地域において、祭りに際して制作・展示される見立て細工を指す。その制作にあたっては生活の道具の中から、「焼きもの一式」、「塗りもの一式」、「金もの一式」のように素材が同じものを集めて用いたり、「餅つき道具一式」、「キッチン用品一式」のように用途が同じものを集めて用いる。このようにして集められた道具を巧みに組み合わせて、縁起物、有名な物語・神話の主人公や名場面、干支の動物、あるいは時



事的な話題や映画やアニメの登場人物などに見立てて制作・展示し、その腕を各町内ごとに競い合う。ただし、用いる道具を傷つけることは禁止され、穴をあけたり、接着剤を使用してはならず、道具を針金で結んだりテープで張ったりしてつなぎ合わせ、祭りが終われば解体して元の道具に戻さなければならない。この「一式飾り」のルーツは江戸時代まで遡ることができ、上方から全国へと広まった庶民文化の伝統を現代まで200年以上にわたって伝える貴重な文化である。

#### 2. 「一式飾り」の価値の見直し

現在、鳥取でも島根でも「一式飾り」について知る人はそれほど多くない。一方、民俗学研究で

は、「一式飾り」はかつて上方を中心に流行した都市祭礼が地方に波及したものと見なされがちである。このような現状に対して、都市部においては既に消滅してしまった伝統が、今なお山陰を中心とした西日本の町々で受け継がれていることの意義を再考し、「一式飾り」の価値を見直す必要があるのではないかと考え、平成24・25年度の鳥取大学地域貢献支援事業（調査地：鳥取県西伯郡南部町）、平成25年度の鳥取大学地域再生プロジェクト（調査地：島根県出雲市平田町、出雲市斐川町、雲南市掛合町）として、地域教育（社会科）ゼミの学生と共にフィールド・ワーク調査を実施している。こうした調査に基づき「一式飾り」という、身近にあるものを用い見立てて飾るという一見単純な遊びのような文化が、なぜ長きにわたって山陰各地で続けられるのか、地域の人々に愛される「一式飾り」の魅力と価値について考察する。

### 3. 「一式飾り」の継承に向けた学習の開発

近年、山陰各地では後継者の減少に対する危機感から、地域の学校において子どもたちに「一式飾り」の伝統を伝えようとする取り組みが始まっているが、必ずしも学校・教員側の十分な理解が得られず、子どもにとっても体験の域を出ない感がある。このような現状に対し、子どもたちが「一式飾り」の価値を学ぶことのできる学習の開発が必要である。そこで社会科教育研究の立場から、「一式飾り」の継承に向けた学習の可能性について考察する。

### 謝辞

調査や発表に際し御支援・御厚情を賜りました南部町の法勝寺一式飾り、出雲市の平田一式飾り、直江一式飾り、雲南市の掛合一式飾りの各保存会と地域の皆様に対し、心より御礼申し上げます。

## 【第2報告】発表要旨

### 鳥取民藝再興 1995—2013

木谷清人（鳥取大学地域学部 地域連携研究員、鳥取民藝美術館常務理事）

野田邦弘（鳥取大学地域学部地域文化学科）

### はじめに

民藝運動は柳宗悦らを中心に大正14年に起こり、民衆の手仕事に「用の美」を見出し「民衆的工藝」を「民藝」と造語し、その保存（古民藝）再生（残存民藝）活用（新作民藝）を図った運動である。鳥取で吉田璋也が起した新作民藝運動は、全国に先駆けた運動で、規模・組織共に大きく、その後の民藝運動の骨格を形成して行く上で重要な役割を担った。昭和47年吉田の没後次第に運動は衰退していったが、平成7年（1995）から鳥取民藝協会が中心となってその再生を目論み、製品開発・情報発信などの展開を図りつつあり、その概要をまとめる。

### 発表内容

- ・民藝運動とは何か？  
民藝の発見 民藝の保存・再生・活用 柳宗悦と吉田璋也
- ・吉田璋也の新作民藝運動
- ・民藝再興 1995 - 2013



- 1995年 手仕事のプロデューサー 久野恵一  
 1998年 『吉田璋也－民藝のプロデューサー』刊行  
 2000年 因州・中井窯 柳宗理ディレクションシリーズ  
 2001年 『吉田璋也のものづくり』刊行  
 2002年 まちが美術館 とっとり手仕事ギャラリー  
 2003年 久野恵一の新作 BEAMS Fennica  
 2007年 民藝館通り・鳥取文化村商店会  
 2009年 『吉田璋也－新作民藝の展開』発行（日本民藝夏季学校）  
 2010年 民藝とトトリプロダクツ協議会の連携  
 2011年 吉田璋也とデザイン  
 2012年 ワールド・デザイン・キャピタル 2012 ヘルシンキ 他  
 2013年 『吉田璋也とデザイン ヘルシンキ・パリ凱旋展』 他

## まとめ

吉田璋也が残した鳥取民藝運動の成果は鳥取の地域における貴重な文化資源であるといえよう。幅広い英知を集め、この貴重な資源を今日的に有効に活用することで、地域の文化・社会・経済に貢献することが出来ると考える。

## 参考文献

1. 吉田璋也：吉田璋也－民芸のプロデューサー，牧野出版，1998.5
2. 鳥取民藝協会編：吉田璋也のものづくり，鳥取民藝協会，2001.4
3. 民藝 第680号（吉田璋也－新作民藝の展開），日本民藝協会，2009.8
4. 木谷清人：デザイナーとしての吉田璋也（邦題），財団法人鳥取民藝協会，2012.9

## [第3報告] 発表要旨

### 地域活性化の手段としてのアーティスト・イン・レジデンスを考える～明倫 AIR で地域の何が変わったのか～

川部 洋（NPO 法人明倫 NEXT100 理事長）  
 藤井 正（鳥取大学地域学部地域政策学科）

## はじめに

明倫 AIR は、鳥取県倉吉市の旧中心市街地の西側にある明倫地区という小学校区コミュニティをベースに、NPO 法人 明倫 NEXT100 が中心になって運営しているアーティスト・イン・レジデンスです。アートに縁もゆかりもなかった地区で、何をするのかも分からないままに始めた AIR ですが、紆余曲折、試行錯誤を重ねながら継続し、今年で4年目になりました。

その取り組みを紹介しながら、「AIRによる地域の活性化とはどういうことか」について、地域での実施者の立場で考えてみたいと思います。他の事例を研究して比較した訳ではないので、あくまで地域を活性化したい地元の人間の、結論の無いツブヤキみたいなものだというご了解ください。

## 発表内容

- 明倫 AIR とは
  - ・ 主催団体について
  - ・ 開催場所について
  - ・ 経緯と変遷について
- 明倫 AIR の目的
  - ・ 地域を活性化するとはどういうことか
  - ・ 明倫 AIR による明倫地区の活性化
- 明倫 AIR で得られたもの
  - ・ アートプロジェクトとしての AIR と活性化の手段としての AIR
  - ・ 明倫 AIR は誰のための事業か
- 明倫 AIR のこれから
  - ・ AIR を続ける理由
  - ・ コミュニティベースの AIR を増やしていくこと

## まとめ

明倫 AIR は、明倫地区の活性化のひとつの手段だと考えています。従って、それが活性化の手段としてあまり有効でないとか、他にもっと有効な手段があるとかすれば、今後中止することもあります。しかし、4年間やってきて感じているのは、アーティストと交流することの楽しさ・面白さがあるだけで、地元の人間にとって AIR をやる意味があるのではないかということです。

それは、外に発信できるものでも、数値的な成果を明確に提示できるものでもありませんが、地元の人間がアーティストに影響を受けて変わっていく（かもしれない）ということこそ、AIR の醍醐味だと考えています。そうしたことが感じられる限り、これからも明倫 AIR は続けていくつもりです。

## <総括セッション要旨>

### 【第3部 総括セッション】

#### 第1分科会総括

#### コミュニティの再生と社会的包摂

柳原邦光（鳥取大学地域学部地域文化学科）

第1分科会のテーマは「コミュニティの再生と社会的包摂」である。これを座長である柳原は次のように意味解釈して、分科会をスタートさせた。「誰もが、一人ひとりが、人として生きる」ということを、最も基本的なところから考えたい。つながりをもつこと自体が難しく、地域からも社会からも排除され、負の連鎖に陥ってしまう状態、なんらかのつながりはあるものの生きにくい状態、地域の知や知恵が生かされないまま、若者とお年寄り、都市の住民と農山村の住民との間に隔たりが生じている状態。この3つの困難に挑んだ取り組みから地域が生き返るために何が重要なのか、何が求められているのかを、まずは社会的排除と包摂の視点から、さらにそれを超える視点から考えたい、ということである。

進め方としては、3つの報告に入る前に、竹川俊夫副座長が「社会的排除」と「社会的包摂」の概念について簡潔な説明を行い、各報告では、報告の後、コメンテーターのコメントと質疑応答を通して論点を確認した。すべての報告が終了した後、座長が「地域学の観点から」総括した。以下、報告の概要と総括である。

#### (1) 各報告の概要

##### 第1報告：小林勝年（地域教育学科）：「障がい者の社会的包摂」

障がいがあるために、進学や就職など、早くも人生のスタート時点において社会システムへの参入と利用が難しく、孤立化・無縁化しやすい状況がある。さらには軽犯罪を重ねて「累犯障がい者」となり、刑務所を唯一の「居場所」とする人もある。この「負の連鎖」を断ち切るために試みられているのが、福祉サービスのネットワークをつくって、犯罪発生の時点から細やかな支援を行って、社会システムへの参入・利用をしやすくすることである。すなわち「地域定着支援センター」の設立とネットワークづくりである。



新たな仕組みを構築して既存のシステムの不備を補うというのであるが、設立から運営を通して見えてきたのは、次の点である。障がいがあるために孤立化・無縁化しやすいのであるから、障がいのある人が生きていくために必要なものを経験的に身につけることができるような諸条件を整えること、つまり地域や社会の関係性のなかに入っていきやすくする工夫が必要である。この意味で地域や社会における関係性の見直しが求められているということである。

## 第2報告：仲野誠（地域政策学科）・三谷 昇（湯梨浜町立羽合小学校教諭）「在住外国人の社会的包摂」

報告は、まず仲野氏が「Tori フレンド network」という外国にルーツをもつ住民たちとその仲間たちによる自助グループの活動を取り上げ、その活動を通して明らかになった新たな視点を紹介し、続いて三谷氏が自らの経験を通して変容していくまなざしと、それが捉えた現実について語った。

仲野氏は、在住外国人が日々直面している小さな具体的問題の一つ一つに目を向け、まずは当事者の「声を聴く」、「受け止める」、そして自らを「振り返る」、「見直す」ことの重要性を指摘した。それは、外国人の生き方や苦勞が鏡になって、日本人が自分のことを振り返り、自分自身の課題として、共に考えていくプロセスでもある。「外国人の」課題が「自分自身の」課題に、「地域の」課題に転換されるプロセスである。そうすることで、在住外国人も日本人もともに包摂されていくのではないか。

三谷氏の報告は次の通りである。日本人は在住外国人について知るところは少なく、その心情に気づかないが、彼らの声に耳を傾けると、変化が生じる。自分に何ができるのかという問いを自らに向けることで、自分が変わらなければならないという思いと力が湧き上がってくる。在住外国人と直接言葉を交わしともに歩んでいくという経験がまずは重要である。

## 第3報告：家中茂（地域政策学科）・清藤奈津子（鳥取大学地域学部地域連携研究員／NPO 法人山里文化研究所理事長）：『山里の聞き書き』という手法—鳥取県智頭町山郷地区の『聞き書き』から

最初に家中氏が鳥取県智頭町山郷地区で鳥取大学地域学部の学生たちが行った「聞き書き」の経緯とその意義について説明し、続いて清藤氏が聞き書きの方法とそこで生じる関係性と変容について具体的に語った。

お二人の報告をまとめれば、次の2点になる。聞き書きにおいて重要なのは、「聞き手」と「話し手」の相互性である。お年寄りと学生、いわば「普通の人」同士の「学び合い」を通して、世代間の隔たりを超えて、互いに理解しあいリスペクトする。こうして世代が結ばれるとともに、互いに「生きる」エネルギーを獲得するのである。

もう1つは、「山里の人の生きる姿勢」「山里の生きてきた道」を知ることで、人と自然との関わりを捉え直すということである。ここでは、「人と自然」が、さらには「過去・現在・未来」がつながれるのである。このような結び直しを通して関係性が再構築され、人の生が広がり豊かになるのである。

### (2) 報告を通して見えてきたこと

以上の3報告から次のようにいうことができるのではないか。まずは、「見ようとしなかったこと」、「見えなかったこと」、「忘却していたこと」に目を向けて、地域における関係性を見直し、「誰もが人として生きていくことができる」ように関係を結び直すということである。それには、一人ひと

りが地域を生きる当事者として、具体的な実践活動を通して互いに学び合い、必要な技法や表現力を身につけることが必要である。

このほかに、社会の諸システムと地域との関係を再考しなければならない。人の暮らしが成り立つこと、まずはここから考えるべきである。諸々のシステムはそのためにある。しかし、システムだけでは人の生を支えられない。ここで問われるのが地域性である。地域性を見つめること、その財産や知を活かしていくとともに、足りないものがあればそれを補い修正していくことが求められる。

最後に、社会的排除・包摂論を超える側面も見えてきたのではないかと。第3報告が示しているように、生きている人間の関係だけが重要なのではない。人と自然との関係や現在と過去や未来との関係もまた視野に入れるべきである。そうした関係に向けて今を生きる人々のまなごしを開いていくこと、生を大きく開いていくことが求められているのではないだろうか。

## 第2分科会総括

### 光多長温（鳥取大学地域学部地域政策学科）

第2分科会は「環境の活用と再生」をテーマとして発表、討論が行われた。個々の報告に関する詳細な討論の後で、全体討論は藻谷氏の基調講演で問題提起された「地域に根差す大学の役割」に関する問題提起に則して行われた。

第一に、人材育成の面では、発表されたテーマに関してこれまでも教員と学生とが一体となって活動が続けてきたこと、基幹科目である地域調査実習が教員と学生とが一体となって地域で調査研究活動を行う一つの場になっていることから、比較的高い評価を与えても良いのではないかという意見がある一方、藻谷氏の問題提起レベルまで更なる向上を図っていくことが必要との意見も出された。

第二に、課題発見と克服の点であるが、環境の活用と再生に関する永遠の議論である「保存と活用」とのバランスについて議論が行われた。高度経済成長期には、歴史的資源を破壊するような開発が行われたことは否定できないが、今後は、保存と活用をアンチテーゼとして捉えるのではなく、個々のプロジェクトにおいて、大学がその識見をもって保存と開発の評価を明確に行い、保存と活用のバランスを図っていくことが必要であるという議論がなされた。また、運動面では明らかな誤りが一般に信じられている面があり、これらについては、大学が正しい情報発信を行っていくべきであるとの指摘がなされた。

第三に、ネットワークキングの形成の点については、鳥取砂丘学を構築していく過程で、学内の輪を更に広げると同時に、自然環境をテーマとして地域学を構築しつつある他の大学（例えば、秋田大学の白神学）とネットワークキングを行い、その輪を更に広げていくことが必要であるとの意見が出された。最後に、本地域学研究会で行政の方や一般市民の方々が来られて普段できない対話を行えたことの意義は大きいものがあり、今後ともこういう場を作ってほしいとの意見があった。



### 第3分科会総括 野田邦弘（鳥取大学地域学部地域文化学科）

第3分科会は「文化の再生」をテーマとして発表、討論が行われた（座長：野田邦弘，副座長：榎木久薫）。地域づくり活動では、住民のイニシアティブにもとづき、地域の固有価値を活かしながら内発的発展に向けた取り組みを行うことが重要との観点から、地域の固有価値としての文化に焦点を当てる取り組みが増えていることをふまえ、途絶えていた地域の祭りの復活やアーティスト・イン・レジデンスなどの活動の報告と、討論を行った。

第一報告は、本学の高橋健司（地域教育学科准教授）「山陰を中心とした『一式飾り』の文化的価値と継承の課題」（コメンテーター：加納英雄平田一式飾保存会技術部長）であった。「一式飾り」とは、南部町、出雲市平田町、雲南市で伝承されている祭りである。食器など日用品を素材に作成した人形などの作品を通りに面した場所に飾る祭りである。非常に現代的なデザインを持つユニークな作風と暮らしの中に生きている祭であることが特徴である。

第二報告は、木谷清人（鳥取民藝美術館常務理事）「鳥取民藝再興」（コメンテーター：白岡彪トトリプロダクツ協議会プロデューサー）であった。民藝運動の歴史を、吉田璋也の活動を紹介しながらとどる発表であった。因州・中井窯の作品など、民藝のテイストを現代に応用して製品化した柳宗理ディレクションの作品紹介とそれらの系譜が報告された。あらためて民藝の持つ潜在的な魅力に気づかされる発表であった。

第三報告は、川部洋（NPO 法人明倫 NEXT100 理事長）の「地域活性化の手段としてのアーティスト・イン・レジデンスを考える～明倫 AIR で地域の何が変わったのか」（コメンテーター：なし）である。小学校区のコミュニティでのまちづくり活動である本事業は、生業、魅力、人と人のつながり形成の3つの目標を持つ。一定の成果はあげた。作品は残さない方針であるが、そのやり方で地域再生をどう進めるかが課題。

発表の後の討論では、「文化の再生」とは何かが議論となった。地域固有の文化資源を見つけ、その価値を活かした地域づくり＝持続可能な地域づくりが「再生」という意味ではないかという結論になった。



## 閉会挨拶

土井康作（地域学研究会副会長・地域学部地域教育学科）

本日は本当にありがとうございました。今日の活動を振り返り、閉会の言葉としたいと思っています。今回、基調講演は、どなたが適任か、地域学研究会の幹事会で議論しました。著書「里山資本主義」をはじめ、今日のさまざまな地域の問題をクローズアップし、活躍しておられる藻谷浩介さんが最適な方ではないかとご依頼することとしました。よく来ていただきましたとお礼を申し上げたとき、「地域について議論している大学を外すわけにはいきません」と言っていたのが、印象的でした。そして、きょう一日、藻谷さんの基調案に沿って各分科会が行われたことがとてもよかったです。とりわけ、藻谷さんが基調講演の中でお話しされました二分法的思考には危うさあること、そしてグラデーショナル思考の必要性、さらに時間軸を1軸加え、5次元の必要性を学ぶことができました。現実や事実を掘り起こしていく、フィールドにある現実、事実をベースにして、検証していく必要性が指摘されました。また課題の発見とか、解決する方法等をまさぐることの必要性を述べられました。人材を世に出していく地域学部の後ろ盾になるような話をいただいたように思います。分科会では、これらの藻谷基調提案をもとに、第1分科会では、「コミュニティの再生と社会的包摂」と題して話がされ、社会システムの必要性、さらには、それぞれの地域住民の意識変革、そういうものがここでは話されたと思っています。

第2分科会では、「環境の活用と再生」をテーマとして話されました。その中でとりわけ印象的だったのは、環境の保護上には、保存と利活用が大切だ、ほっておくだけではないのだと、活用する中で初めて重要性というのが見えてくるのだと、さらには行政の制度も加えて必要であるということが話されました。その中で大学が果たす役割があると思います。藻谷さんの話にあるように、エビデンスをきちんとしていく必要があるということも話されていました。とりわけ、安易に自然に手を加えていくということではないという指摘なされたと思っています。

第3分科会では、地域に愛されている民芸とか、一式飾りを初め、今日残っている地域資源、いわゆる貴重な資源を有効に活用すること、これは第2分科会にも共通することだと思いますが、活用するそのことが、地域の文化社会、経済に貢献していくということが話されました。

人々が生きている地域をしっかりと見詰める、さらには今の現実をフィールドに出て、その中で事実をつかんでいく活動が、まず必要であろうと。その中で、価値を見出す、事実を検証していく、さらにはネットワークをつくって、その成果を世に問うことが必要ではないかと考えます。しかし、現実的にこのような活動がなされていても、世に問うことが非常に弱く、我々の地道な活動が余り知られていかないということは、やはり問題であろうと思っています。ある意味で、強く発信していく必要もあるのではないかと思います。大学は、これらの一連のプロセスにかかわっていくことがとても大切だと思います。一部にかかわることではなく、ただ検証することだけでなく、スタートから地域に我々がきちんとかかわって、そしてそれを検証し、事実を世に問うていく、こういうことが求められるのではないかと思います。最後になりますが、今回かかわっていただきました報告者の方、それからコメンテーターの方、さらには座長の方にお礼を申し上げたいと思います。そして、鳥取県をはじめ、鳥取大学の尚徳同窓会の方々には、感謝を申し上げたいと思います。

我々は来年もまた、このような大会を続けていけるように、本大会を総括して、来年に向けていきたいと思っています。

## 資料1 プログラム

## 第4回地域学研究会大会

## 「地域課題と知のクロス」～地域再生のための教育・研究の拠点形成～

\*\*\*\*\*  
 このたび鳥取大学は、文部科学省特別経費事業として、地域学部を中心に「地域再生を担う実践力ある人材の育成及び地域再生活動の推進」プロジェクトを3年間にわたって実施します。そこで今年度の地域学研究会第4回大会では、「**地域課題と知のクロス～地域再生のための教育・研究の拠点形成～**」と題し、地域課題の解決を担う人材育成のあり方や地域再生に向けた大学の役割について、講演会や分科会を通じ、多くの地域のみなさまとともに議論を深めたいと考えています。

\*\*\*\*\*  
 [主催] 鳥取大学地域学部

[後援] 鳥取県・新日本海新聞社・鳥取大学尚徳同窓会

## [プログラム]

(A20 大講義室)

- 開会挨拶 9:30 安藤 由和 (地域学研究会会長/鳥取大学地域学部長)
- 理事挨拶 9:35 法橋 誠 (鳥取大学理事〈経営担当, 地域連携担当〉/副学長)
- 学部プロジェクトと大会趣旨説明 9:40  
藤井 正 (地域学研究会副会長/鳥取大学地域学部副学部長)

## 【第1部】基調講演 10:00～11:40

藻谷 浩介 ((株)日本総合研究所 調査部 主席研究員)

「地域課題解決のために大学が果たすべき役割—地域で求められる人材育成—」

《共通教育棟 A20 大講義室入口前スペース》11:45～13:00, 15:15～15:45

【ポスター展示 (次頁参照)】(コアタイム: 12:00～12:45)

【学生・市民による「トットリ式屋台」(カフェコーナー)】(全品寄付制)

ネルドコーヒー(湯梨浜), 紅茶, きりたんぼ, スコーンなど

## 【第2部】分科会 13:00～15:15 3階 A31～33 講義室

第1分科会 (A31 講義室)「コミュニティの再生と社会的包摂」

[座長・副座長] 柳原 邦光 (地域文化学科)・竹川 俊夫 (地域政策学科)

[報告者]

- 1 小林 勝年 (地域教育学科)・中川 康恵 (特定非営利活動法人ひつじの会理事)  
「障がい者の社会的包摂」
- 2 三谷 昇 (湯梨浜町立羽合小学校教諭)・仲野 誠 (地域政策学科)

- 「在住外国人の社会的包摂 -鳥取県中部地域の『Tori フレンド network』を事例に-」
- 3 清藤 奈津子 (地域連携研究員)・家中 茂 (地域政策学科)  
 『山里の聞き書き』という手法 -鳥取県智頭町山郷地区の『聞き書き』から-  
 [コメンテーター]尾崎 史明 (鳥取県地域振興部とっとり暮らし支援課長)  
 川本 晴彦 (鳥取県総務部人権局人権・同和対策課長)

第2分科会 (A32 講義室)「環境の活用と再生」

- [座長・副座長] 光多 長温 (特任教授)・藤井 正 (地域政策学科)  
 [報告者]
- 1 高田 健一 (地域環境学科)  
 「歴史的環境を活用する視点」
- 2 関 耕二 (地域教育学科)  
 「自然環境を活かした運動による地域の活性化の検討」
- 3 小玉 芳敬 (地域環境学科)  
 「鳥取砂丘の個性発信に向けた『鳥取砂丘学』の構築」  
 [コメンテーター]佐々木 孝文 (鳥取市教育委員会文化財課課長補佐兼文化財専門員)  
 堀田 利明 (鳥取県生活環境部砂丘事務所長)

第3分科会 (A33 講義室)「文化の再生」

- [座長・副座長] 野田 邦弘 (地域文化学科)・榎木 久薫 (地域文化学科)  
 [報告者]
- 1 高橋 健司 (地域教育学科)  
 「山陰を中心とした『一式飾り』の文化的価値と継承の課題」
- 2 木谷 清人 (地域連携研究員)・野田 邦弘 (地域文化学科)  
 「鳥取民芸再興 1995-2013」
- 3 川部 洋 (地域連携研究員)・藤井 正 (地域政策学科)  
 「地域活性化の手段としてのアーティスト・イン・レジデンスを考える～明倫 AIR で地域の何がかわったのか」  
 [コメンテーター]加納 英雄 (平田一式飾保存会技術部長)  
 白岡 彪 (トトリプロダクツ協議会プロデューサー)

【第3部】総括セッション 15:45～16:10 (A20 大講義室)  
 各分科会の報告

■閉会挨拶 土井 康作 (地域学研究会副会長)

資料2 チラシ

# 地域学研究会 第4回大会 地域課題と知のクロス

～地域再生のための教育・研究の拠点形成～



2013年 **11月30日** (土)  
9:30～16:15 (受付 9:00)  
鳥取大学共通教育棟 A20大講義室 ほか

このたび鳥取大学は、文部科学省特別調査事業として、地域学部を中心に「地域再生を担う実践力ある人材の育成及び地域再生活動の推進」プロジェクトを3年間にわたって実施します。  
そこで今年度の地域学研究会第4回大会では、「地域課題と知のクロス～地域再生のための教育・研究の拠点形成～」と題し、地域課題の解決を担う人材育成のあり方や地域再生に向けた大学の役割について、講演会や分科会を通じて、多くの地域のみならずともに情報を深めたいと考えています。

【第1部】基調講演 **地域課題解決のために大学が果たすべき役割**  
—地域で求められる人材育成—

講師：齋谷 浩介氏 (鳥) 日本総合研究所 調査部 主席研究員



【第2部】分科会 【第3部】総括セッション 【その他】ポスター展示

主催 鳥取大学地域学部 後援 鳥取県・前日本海新聞社・鳥取大学共済西農会  
お問い合わせ先…鳥取大学地域学課連絡係 (0857) 31-5073

## 大会スケジュール

9:00～ 受付 (共通教育棟 2階)

9:30～ 開会挨拶・学長挨拶  
9:40～ 地域再生プロジェクトについて

10:00～ 【第1部】基調講演 (A20)  
**地域課題解決のために大学が果たすべき役割**  
 —地域で求められる人材育成—  
 講師：齋谷浩介氏 (鳥) 日本総合研究所 調査部 主席研究員  
 司会：アフレの正秋 (鳥) 岡山大学主幹

11:40～ 分科会の案内  
11:45～ 昼食・ポスター展示 (大学食堂利用可)  
 「トトリ式舞台」による昼食コーナーの開催  
 昼食時間 (11:45～13:00) と休憩時間 (15:15～15:45) に、共通教育棟A  
 20大講義室前の入会スペースを利用して、学生と地域住民の両  
 方による「トトリ式舞台」分科会場の発表を行います。  
 ポスター展示 (11:45～13:45) (学生・地域学研究会)  
 共通教育棟 A20 大講義室前スペース

13:00～ 【第2部】分科会  
**第1分科会「コミュニティの再生と社会的包摂」 A31 第1部**  
 都市では急速な孤立化が進み、農村では高齢化や限界集落が顕著となるなか、安心・安全で持続可  
 能なコミュニティづくりが共通の課題となっています。一方、障がい者や社会外国人など多岐に  
 わたる課題も顕著として顕著です。本分科会ではこのような観点から、自治体やNPOの社会  
 的包摂に向け先取り取り組みなど多様な事例からコミュニティ再生のあり方について議論します。

**第2分科会「雇用の活用と再生」 A32 第2部**  
 地域の発展や再生としての雇用の活用や再生は、地域経済の活性化としての意味やそれら環境の持  
 続可能性だけでなく、その地域で暮らす人々の生活の持続可能性としても考え、活用と地域再生を立  
 ち上げたいと訴求されています。本分科会ではこのような観点から、自治体・歴史遺産と地域人々の  
 生活、地域再生をつなぐという課題について議論します。

**第3分科会「文化の再生」 A33 第3部**  
 地域づくりは、住民が主体となって地場固有の価値を活かしながら取り組むことが重要です。歴史、  
 文化に集まることで地域のコミュニティの再生は進むことが期待されています。過去にい  
 た地域づくりの取組やアーティストを招き寄せた活動するアーティスト・イン・レジデンスなどを  
 本分科会ではこのような観点から、伝統文化やアートのもつ価値と活用の可能性について議論します。

15:15～ 休憩

15:45～ 【第3部】総括セッション (A20)

16:10～ 閉会挨拶

私たちの地域課題をみんなで考えましょう！

会場案内



## 資料3 ポスター発表

2013.11.30地域学研究大会ポスター発表

掲示時間: 11:45-13:00, 15:15~15:45

コアタイム: 12:00-12:45

発表#	発表者/所属	題目
1	地域学部	地域学部の紹介
2	地域政策学科	地域政策学科の紹介
3	地域教育学科	地域教育学科の紹介
4	地域文化学科	地域文化学科の紹介
5	地域環境学科	地域環境学科の紹介
6	芸術文化センター	芸術文化センターの紹介
7	家中 茂 地域政策学科	人工林の間伐及び林地残林の有効利用を促進するための 社会システム構築に関する環境社会学的研究
8	安藤真帆・鍛冶佑衣子・村岡美咲・山田 優・ 家中 茂 地域政策学科・地域再生フィールドワーク「山 里の聞き書き」	つながる つなげる—山郷からの贈り物 鳥取県智頭町山郷の聞き書き
9	皆田 潔 NPO ine oasa(い〜ね! おおあさ)(地域学部 地域連携研究員)	「山・海・島体験活動」によるツーリズムモデルの形成過程 —広島県北広島町での実践を事例に—
10	高橋健司 地域教育学科	山陰を中心とした「一式飾り」の文化的価値と継承の課題 (1)鳥取県南部町法勝寺の「一式飾り」
11	高橋健司 地域教育学科	山陰を中心とした「一式飾り」の文化的価値と継承の課題 (2)鳥根県出雲市平田町の「一式飾り」
12	高橋健司 地域教育学科	山陰を中心とした「一式飾り」の文化的価値と継承の課題 (3)鳥根県出雲市斐川町直江の「一式飾り」
13	○小玉芳敬・渡壁卓磨 地域環境学科	Restration of the coastal Geo-environment along Tottori Sand Dunes (鳥取砂丘海岸に認められる自然環境の回復実態)
14	○関 耕二 <sup>1</sup> ・露木亮人 <sup>1,2</sup> ・米嶋美智子 <sup>3</sup> 1地域教育学科,2郡家東小学校,3鳥取大学 附属小学校	児童の体力と運動習慣が足指筋力へ及ぼす影響について
15	高橋史明・○藤井 正 地域政策学科・鳥大たのしみまちづくり連	わいわい淀屋(淀屋サミット)における学生企画 —鳥取県倉吉市のNPO明倫NEXT100との協働—
16	アレクサンダー・ギンナン 地域学研究科	芸術文化が映す地域的イメージ:20世紀鳥取の事例